サイエンス読書カフェ

店主の独りごと（第6回）

前日本科学技術ジャーナリスト会議会長・元読売新聞編集委員
小出重幸

全体像を伝える難しさ

ニュース現場の「現実」と、映像や画像で伝えられる「報道の事実」。

実は、この二つは決して一緒にはなりません。〝一定の誤差〟が避けられないからです。実例をあげて説明しましょう。

2015年5月、中東呼吸器症候群「MERS」が韓国に上陸、40人近い死者を出す騒動がありました。

ソウルで2015年に開催された科学ジャーナリスト世界会議

その渦中の6月8日から12日、世界55か国から1000人以上がソウルに集まり、「科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ2015）」が開かれました。私も参加していましたので、患者は、収容した医療機関周辺に限られ、ソウル市民の大半は普段通りの生活を送っていたことを確認しています。それでも連日、各国のテレビ、ネット・ニュースは、「院内を駆け回る医療関係者」、「予約キャンセルに悲鳴をあげる旅行会社」、「マスクの売り場に殺到する市民」……といった、〝パニック映像〟であふれ、日本の家族や知人も心配していました。

セッションで発表する筆者

科学ジャーナリストの間でも、このパニック報道と、自分たちが目で見る平静な状況との乖離（かいり）が、話題になりました。

「だからといって、マスクをしていない群衆を撮ってもニュースにはならない」、「被害の激しさ、深刻さを伝える映像があって、初めて視聴者に振り向いてもらえる」――テレビメディアも含めて、熱い討論がかわされました。確かに限られた紙面や、「ニュース」の放映枠を獲得するためには、驚き、インパクトのある画像が不可欠。それがなければ、ニュース自体がボツになる」という、報道現場の現実があります。

東日本大震災の被災地。地域によって被災状況は大きく異なった（気仙沼市内で撮影）

ところが、過激な映像が何度もリフレインされるうちに、見ている方は、ソウル全体に蔓延（まんえん）、パニックなのだと勘違いしてしまいます。

同じことは、2016年の熊本地震、今年、西日本を襲った集中豪雨や、北海道地震にも当てはまります。地域によって被害の程度に差があるのに、全地域が甚大な被害を受けたと思われがちです。北海道地震では、一部だけであった札幌市清田区の液状化被害が何度も放映され、札幌市内全体が大きな被害にあったと勘違いする人が多かったようです。

現場での報道にウソはありません。でもそれが繰り返されると、私たちは被害の全体像を見失いがちになる……。この誤差を縮める努力は必要ですが、現実と報道の距離は、物理学の「不確定性原理」のように、「一定以下には小さくできない」、という法則がありそうです。

サイエンス読書カフェでも、リスクをどのように伝えるかが、何度も討論のテーマになりました。報道内容にも誤差が潜んでいること、社会にゼロリスクはないことなど、常に全体観の中で判断する大切さを、忘れないようにしたいと思います。

小出重幸（こいで しげゆき）1951年東京生まれ。科学ジャーナリスト。北海道大学理学部卒。政策研究大学院大学（GRIPS）客員研究員。昭和薬科大学講師。よみうり大手町スクールで「サイエンス読売カフェ」の〝店主〟をつとめている。